

優秀作品賞  
「健診に感謝」

泉 真知子さん

『心肥大』、精密検査が必要だって」

健診結果を手に夫が言ったとき、それが何を意味するのか、見当がつかなかった。当時57歳だった夫は、結婚生活26年の中で、風邪で仕事を休んだのは1回だけ。芯の丈夫な人だとずっと思っていた。

数週間後、夫は精密検査を受けた。

「心臓弁膜症だって言われたよ。いずれ手術しなきゃ駄目らしい」

帰宅した夫がそう言ったので、私は本当に驚いてしまった。心臓病の人は、階段を少し上っただけで動悸がしたり、急に胸が痛くなって倒れたりする。そんなイメージと目の前の夫はかけ離れている。息切れなどの自覚症状は全くないという。

何かの間違いであって欲しい。診断通りだとしても手術以外の選択肢はないのか。私は心臓弁膜症の専門医を本やインターネットで探した。幸い、よい病院が見つかり、夫は循環器内科の医師の紹介状を持って、専門医のいる病院を受診した。

検査の結果、大動脈弁閉鎖不全症であること、しかも、かなり進行していて1年以内に手術を受ける必要があることがわかった。

「まさか自分が手術するような病気になるなんて夢にも思わなかったよ」

ふだんは淡々としている夫もさすがにショックを受けた様子だった。当時、長男は大学生、次男はまだ高校生だった。80代半ばの義母もいる。私はその3年ほど前にフルタイムの勤めを辞め、非常勤で働いていた。夫はこれからどうなってしまうのだろう。目に見えない、黒い大きな塊が胸にのしかかって来るような不安を覚えた。

でも、こうなったら、夫が手術を乗り越えられるよう、私が支えなければならぬ。夫が元気に働いているのが当たり前で、頼りっぱなしだったが、気持

ちを切り替えなければと自分に言い聞かせた。

夫はカテーテル検査など、手術に向けた検査を受け、結果をふたりで聞きに行った。

主治医は終始穏やかな口調で、病状や手術について丁寧に説明してくれた。私はずっと疑問に思っていたことを尋ねた。

「全然自覚症状がない人に、なぜ手術が必要なのですか」

医師は笑みを絶やさず、心臓の模型を示しながら詳しく話してくれた。

弁が正常に働かないと血液が逆流し、心臓に負担がかかるため、徐々に肥大する。心臓の筋肉はゴムみたいなものだから、一度伸びきってしまえばもう元には戻らない。そうなるとう手術が出来ないこともある。

「弁膜症の場合、自覚症状が出てからでは遅いんですよ。今の時点でわかって本当によかったですね」

医師の言葉が強く胸に響いた。難しい病気になってしまっ夫は不運だと思っていたけれど、検診を受けていたから手遅れにならずにすんだのだと気づかされた。

半年後、手術は無事成功、退院後数週間の自宅療養を経て職場復帰した。それから定年退職までのおよそ3年間、一度も病気で休むこともなく勤め上げた。

手術から今年で10年になる。夫は、血液が固まらないようにする薬を飲むこと以外は健康な人と変わらない生活を送っている。毎日の散歩や体操を欠かさず、時々ふたりで旅行に出かけたりもする。お互い、節々が痛かったり、人の名前が出てこなかったり、たまに口げんかもするけれど、穏やかな暮らしが続いている。

昨年、長男の結婚式があり、披露宴の最後に夫が謝辞を述べた。始まる前は緊張気味で「胸がドキドキして声が出ない」などと言っていたが、張りのある声で堂々とした話しぶりだった。もし、あの時心臓の病に気づけなかったら、今日ここに夫はいなかったのかもしれない。そう思うと目頭が熱くなった。

先日こんなことがあった。

「明日は会社の健診だから、9時以降は飲み食いしちゃいけないんだ。朝は、おしっこもとらんきゃならんし、あー、毎年面倒くさいなあ」

帰宅した次男がぶつぶつ言う。夫が病気になった時には高校生だった彼も、社会人になって3年になる。

「健診って確かに面倒だよ。お母さんも若い頃はそう思っていた。特に終わるまで飲食禁止は辛い。でも、お父さんは毎年健診を受けていたから、助かったんだよ。自覚症状がないまま進行する病気は色々ある。具合が悪くなってからでは手遅れになることもある。健診を受けられるって幸せなことだよ。」

私がそう言うと、彼は珍しく真顔で頷き

「なるほど。お母さんもたまにはいいこと言うね」